

ホワイトカラー生産性調査サービス

測定が難しいシステム導入によるホワイトカラーの生産性向上度合いを、短期間で簡易的に調査して定量的に示します。このサービスは、生産性調査でよくみられる“調整”や“資料作成”といった作業項目での評価のみならず、“年度計画立案”“市場調査”といった、マネジメント層が理解できる業務項目ベースで効果を示すことが特徴です。

ホワイトカラー生産性調査の必要性

ユーザー部門が対象システムを活用することによって、どの程度生産性を向上できたか、定量・定性両面から把握します。これにより、成功事例の全社展開や費用対効果の振り返りなど、積極的な IT マネジメントを遂行できるようになります。

管理者層

- ① 製品導入時の目的の1つである、生産性向上度合いの実現状況がわかる（事後評価ができる）
- ② 業務項目別に業務量の可視化ができる

システム部門

- ③ 今後、（新規）導入を検討する場合の効果測定のポイントがわかる
- ④ システム本部の役割（導入後の効果実現支援）を、ユーザー部門にアピールできる
- ⑤ ユーザー部門とのコミュニケーションのツールとして利用できる（指標が2つの部門をつなぐ）

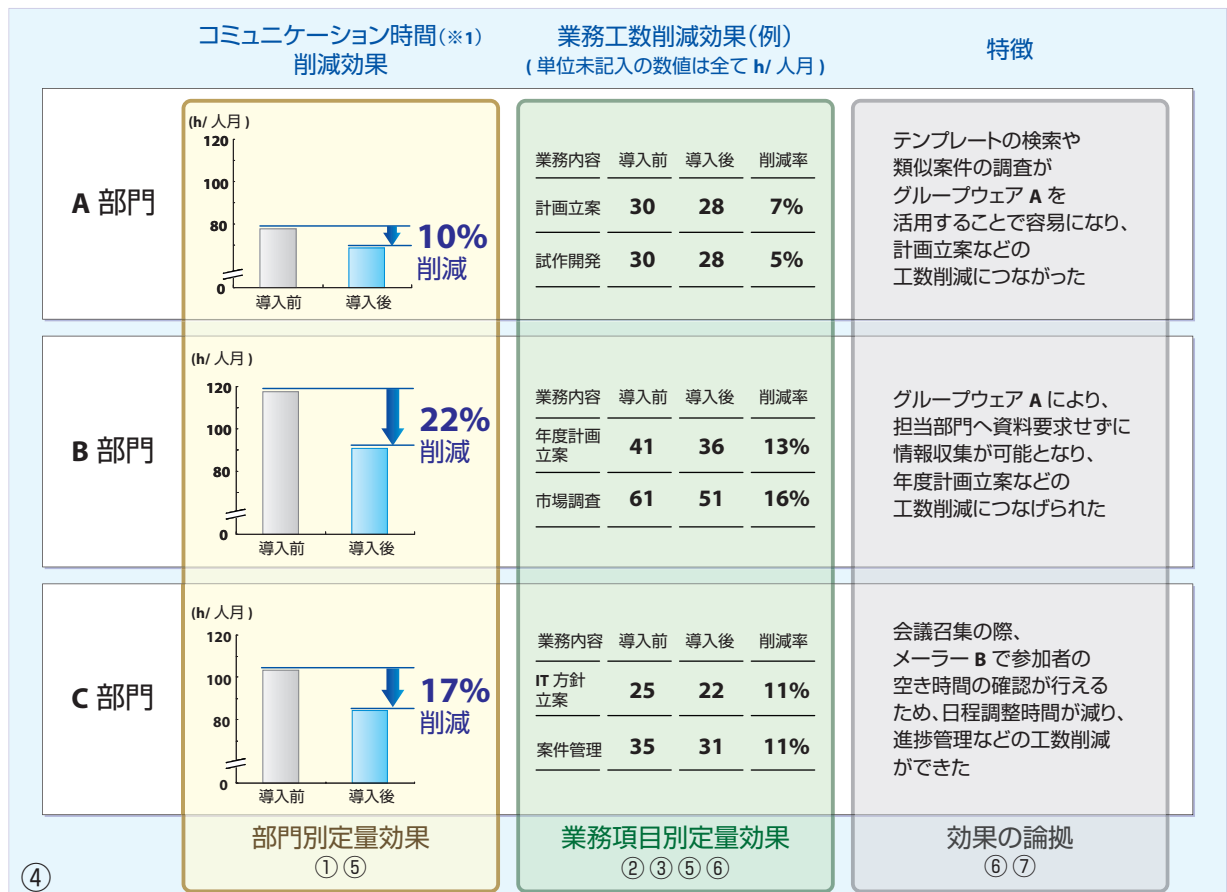
ユーザー部門

- ⑥ 客観的に、製品の活用度合いや改善ポイントがわかる
- ⑦ より効果を引き出すための方法を、自社内および他社での活用例の共有などで知ることができる

調査例

ここでは予定調整・情報検索および収集などのコミュニケーション時間を改善するシステム導入を行った際の成果物例を示します。まず、測定部門別に生産性向上度合い（工数削減効果）を定量的に示します。さらに、その部門の“業務項目”にブレイクダウンしその効果を示します。同時に、定性面での特徴も示すことで、数値とその論拠をマネジメント層がわかるような形で表現します。

成果物例（コミュニケーション工数測定結果）

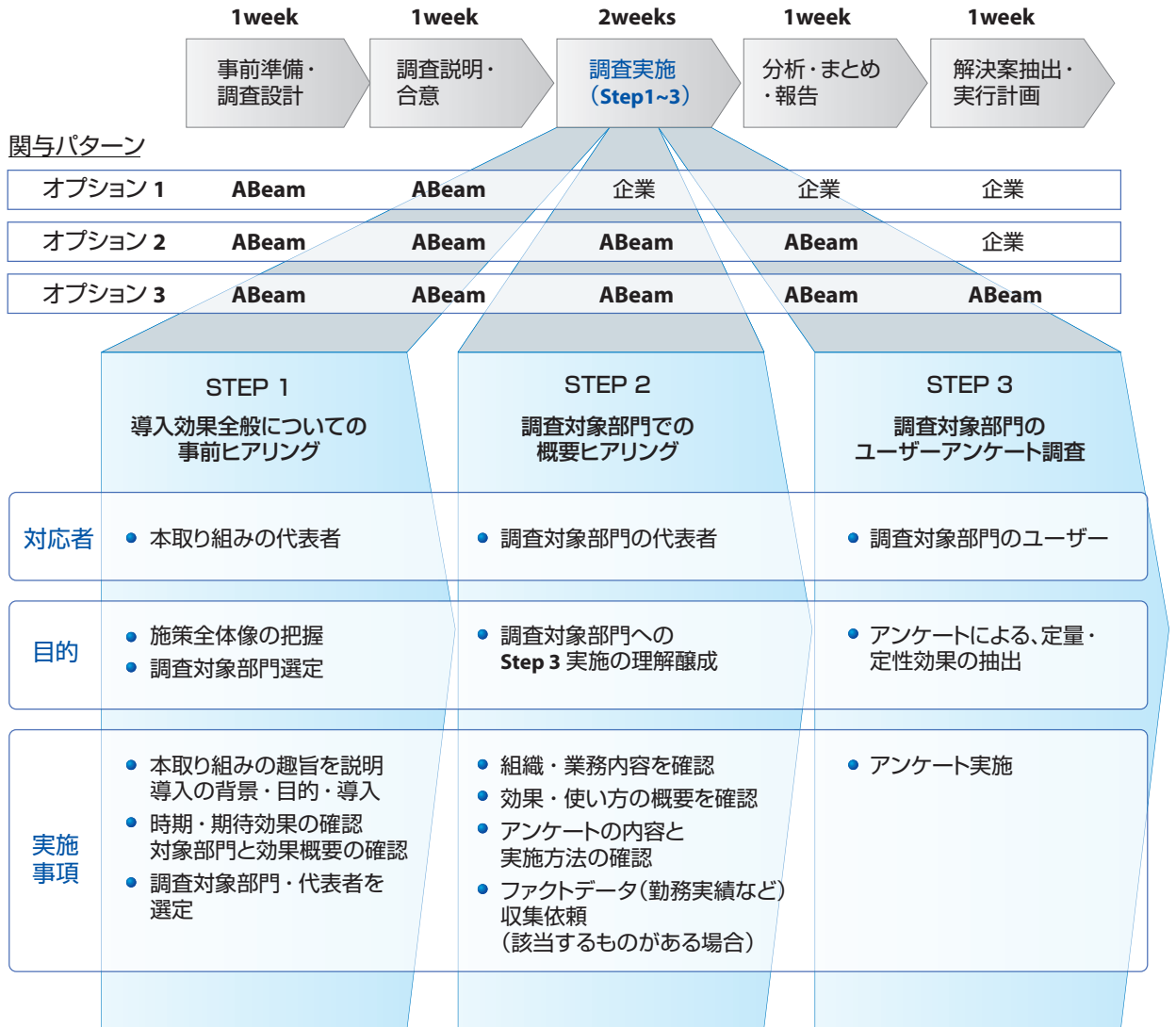


(※1) 社内でのコミュニケーションに要する時間(予定調整、社内情報検索・収集、進捗管理など)、主に個人で行う作業(考察、資料作成、設計作業など)を除いたもの
(丸番号：「ホワイトカラー生産性調査の必要性」の番号に該当)

サービスアプローチ

アポイント回数・人数を最小限に留めるなど、効率的に進めるよう設計しています。
また、取り組みレベルに応じて、コンサルタントの関与度を調整するようなオプションも設定しています。

調査アプローチ



体制と役割

システム部門を核に、自社内で調査が完結する体制を標準としています。

